

テーマ

◎「東京都の中学校におけるこれからの部活動の方向性」

- (1) 「部活動改革及び地域クラブ活動の推進等に関する総合的なガイドライン」骨子(案)について
- (2) 「東京都における中学校の部活動改革に関する推進計画」骨子(案)について

委員からの発言概要

【目標の設定】

① 改革実行期間の目標は、どのように設定するのが適切か。

- 生徒の活動機会の確保・充実を目標にしていきたい。選択肢と同時に、活動量がどのくらい増えたか、自分が希望する部活動等に入れるかという満足度も、目標としては良いのではないか。
- 目標については、生徒の活動機会の確保・充実が第一にこななければならないと考える。続いて、教員の働き方改革。この2点が、目標を設定する上で核になるものだと考える。

【取組】

②改革実行期間の前半と後半で、どのように取り組むことが適切か。

- 国は、まずは休日の部活動を地域展開すると示しているが、平日も負担が大きい。地域展開したり、拠点化したりすることで、平日も休日も一体化して進めていくことは、学校にとっても、子供たちにとっても受け取りやすく、教員にとってもよい動きかと思う。
- 地域展開が困難な地区や学校については、部活動をそのままの形で継続するのではなく、教員の働き方改革も踏まえ、拠点化や外部人材の活用等、各地区の実態にあった着実な取組を進める。

【成果指標】

③ 改革実行期間の成果指標について、どのように考えるべきか。

- 部活動と地域クラブ活動を分けて満足度を測らずに、スポーツ・文化芸術活動として一括りにして満足度を測っていく必要がある。
- 現在、部活動に参加している生徒が非常に多いが、現状でもかなり満足度が高いという状況がある。満足度が向上するに越したことはないが、教員の負担が軽減されつつ、子供たちの満足感が維持できればそれも成果と考える。

【期間】

④ 目標や成果指標の設定の期間は、3年後又は6年後を設定することが適切か。

- 都全体と各地区の取組の進捗状況を確認するためにも3年後の中間評価は大切である。アンケートや情報交換等により進捗状況を確認し、各地区に共有しながら進めていただきたい。
- 一概に3年後や6年後という設定で一括りにしてしまうと弊害もあるように感じる。期間を設定しつつ、生徒を置き去りにしないように地域の状況に応じてスモールステップで、丁寧に状況を確認しながら取り組むことが大事である。

【地域連携の推進】

⑤ 拠点化や外部人材の活用を推進する際の成果指標について、どのように考えるべきか。

- 拠点校部活動や部活動指導員が増えたから成果があったということではないため、定量的に示すことは困難である。やりたい運動ができた、望んでいる専門的指導が受けられているかというアンケートは、これからも必要である。
- 従事時間が減ることも大切であるが、一方で、指導に携わりたくない教員の負担の軽減のためにも、携わらなくてもいい取組から始めることも考えられる。

【全ての生徒の希望に応じた多種多様な活動】

⑥子供の立場に立って、部活動という枠組みを越え、障害のある生徒や運動が苦手な生徒を含む全ての生徒に対して、どのように活動に関わる機会を設定するべきか。

- 子供一人一人が求めているものが多様化しており、それを全て部活動で担保するのは困難である。多様な活動を希望する子供たちに、活動を紹介することができれば、様々な活動に参加できるし、人と触れ合うような機会を提供することができる。
- 「YAT」については、特別支援学校の生徒も参加しやすい環境が整っていると思っている。軽音楽、eスポーツといった選択肢があるところが非常に魅力的である。生涯スポーツ、生涯学習に発展する取組の一つであり、対象を広げて進めていけると良い。

【座長のまとめ（概要）】

- 地域展開された場合、子供たちは「参加」ではなく、活動に「参画」することが大切で、部活動で行ってきた活動を、地域でも生かすことができる支援が重要である。
- 「部活動に満足している」という子供たちのアンケート結果があるが、それは、教員の負担の上に成り立っており、教員の負担がなくなった形で、なおかつ子供たちの満足度が維持できるのであれば、評価をして良いのではないか。
- 多様な活動を継続的に出来る仕組みは、今までの日本の部活動だけでは難しいが、制度設計をしていく必要がある。自分がやりたいと思ったら、必ずそこにアプローチできたり、継続したい時に継続できたりする等、本人が決められる仕組みを用意することが非常に重要である。
- 子供を中心としながら、指導者の方も、保護者の方も、そして関わってくださる方々みんなが高まっていくような、全体が高まっていく環境を作ることが必要である。